



八重瀬町戦争遺跡公園(ヌヌマチガマ)

沖縄では自然洞穴のことを「ガマ」といい、八重瀬町戦争遺跡公園にある全長約500mのガマ(一部人口壕)の西側を「ヌヌマチガマ」と呼んでいます。戦時下のヌヌマチガマは、負傷兵を収容する病院壕として使用されていましたが、薬品等の不足により十分な治療が行えず、非常に劣悪な環境でした。現在は、戦争遺跡公園として駐車場や公衆トイレ、ガジュマルの巨木が並ぶ遊歩道などが整備され、平和教育の場として利用されています。



クラシンウジョウ

尚巴志の三男、具志頭王子の墓だといわれ、具志頭城址の真下に位置します。沖縄戦では米軍の上陸に備え、日本軍が自然洞窟を拡張し、陣地壕にしました。壕は全長約150m、6、7カ所に出入口が設けられています。壕中にはカマド跡がある炊事場や石積みで囲った区画部分、壁にはロウソク台などが残っています。



第24師団第一野戦病院跡 (本部壕・手術場壕)

八重瀬岳に掘られた病院壕で、本部壕(通称:下の壕)と手術場壕(通称:上の壕)があり、軍医や看護婦、衛生兵とともに県立第二高等女学校の「白梅学徒隊」が配属されました。地上戦の激化によって負傷者が続々運ばれたためベッド不足となり、新城分院(ヌヌマチガマ・ガラビガマ)が開設されました。写真は手術場壕跡の入口で、平和ガイドを行っている様子です。



第一野戦病院跡で、平和講話を行う元白梅学徒の武村豊さんと中山キクさん

第32軍が港川海岸を米軍の上陸地点の一つとして想定し、地上部隊とマルレ部隊(海の特攻部隊)が配備され、八重瀬岳のもとには第一野戦病院が設置されました。1945年3月23日の沖縄戦開始以降、沖縄本島の地上戦により日本軍の敗北は明らかとなりましたが、八重瀬岳などが「最後の死守戦」と設定されたため戦場となり、具志頭の住民は2度にわたる日本軍の立ち退き命令を受け、戦場をさまよいました。さらに司令部のある摩文仁ヶ丘を守るために徹底抗戦を命じました。そのため、特に具志頭地域は修羅場となり、多くの住民が悲惨な最期をとげました。

八重瀬岳を中心に
犠牲となった八重瀬